

アルケイア―記録・情報・歴史―
第九号 二〇一五年三月 一五七―一九一頁
南山アーカイブズ

ヨハネス・ヒルシュマイヤー
「南山学園―その沿革と将来の展望」講演録と解説

永井英治

南山大学文学部人類文化学科

Johannes Hirschmeier's Lecture 'Nanzan School Corporation: Its
History and Future Prospects' and Commentary

Department of Anthropology and Philosophy, Faculty of Humanities,
Nanzan University

NAGAI Eiji

Archeia: Documents, Information and History
No.9 March, 2015 pp.157-191
Nanzan Archives

〔講演録〕

南山学園史／南山中学校の設立／総合学園／パッへの構想／神言会と南山学園／神言会について／修道士の誓い／神言会のミッション／国際交流としての外国人教員／「人間の尊厳のために」／日本におけるミッション系スクール／南山学園の四つの理念／真理／キリスト教主義に基づく教育／国際性／地域社会に対する責任／社会人と大学／南山ファミリー／展望／課題としての国際交流／施設の拡充

〔解説〕 小冊子にみる南山大学略史とJ・ヒルシュマイヤーの講演

はじめに

- 一 いくつかの小冊子
- 二 南山大学創立二十五周年史
- 三 ヒルシュマイヤーの講演
- 四 「南山学園―その沿革と将来の展望」

南山学園―その沿革と将来の展望

ヨハネス・ヒルシュマイヤー

南山学園史

初めてこのようなテーマで話しているのですが、全然慣れていません。おまけに沿革史については、私はあまりベテランではありません。私は永年勤続の中で真ん中ぐらいですし、そんなに自分で覚えていません。だいたい、記録からとか、本を見て、ちょいちょいとまとめただけでございますが、最近いらした方よりは少し分かります。しかし、沿革史というのは私が日本に来る前のことです。そこら辺で問題を整理してみたのですが、実は、今日の話の内容は書面でまとままして、この秋に印刷され、皆さんに配られることになると思います。

特に南山学園、南山大学の教育理念で、もちろんその中に沿革史、また、神言会の役割が非常に重大な地位を占めているのは当然でございますので、今日、ノートを取らなくても、きれいに印刷された形で皆さんに配られる予定でございます。今、テキストを整理しているのは、K君です。ぜひ、今年の秋まで

にお願いするのだと。去年準備しようと思ったのですが、なかなか時間がかかりました。

南山中学校の設立

まず一番に、沿革史というのは、神言会から始めるのではなく、南山学園そのものから始めますと、一九三二年にライネルス博士が南山中学校を設立したということです。名古屋市中から、およそ三、〇〇坪ぐらいを、今の杖中というところに購入、払い下げてもらいました。そのときは大変おかしく思われまして、名古屋は遠いところにあるので、どうして、そういう変な、誰もいないところに中学校を造るのかという話がありました。道も整備されていませんでしたし、誰も将来のビジョンを考えませんでした。

そのときに、まず注目を引いたのは、今、ライネルス記念館とされる、中央の男子中学のビルです。本来に名古屋の最初のモダンビルとして、注目を引いたそうです。最初は大変スケールが小さくて、男子六〇名が履修しました。だんだんと学生数が増えまして、結局、終戦直前に七〇〇名までいきました。

ライネルス博士は最初から、神言会の創立者、アーノルド・ヤンセンによって日本に派遣されて、「おまえは教育に尽くせ」と言われました。日本は大変、文化の国でありますから、日本

で宣教活動をするなら、やはり教育の中に、教育を通じてしなければならぬという確信を持っていました。もちろん、アーノルド・ヤンセンは日本を知らないもので、いろいろ勉強しました。しかし、日本について非常に高い理解を持っていたライネルスは派遣しました。最初からのライネルスの協力者として、若いバツヘ神父と、もう一人、ザイデル神父がいました。

ライネルスは名古屋の教区長に任命されました。彼が実は、日本に来て最初に、これは神言会の姉妹会みたいなものですが、聖霊病院を経営している聖霊会の学校を秋田でちよつと手伝つたりして、名古屋に transfer されて、教区長となりました。

教区長といっても、だいたい一、〇〇〇名のカトリック信者の名古屋教区でしたから、お金の力は何もありません。では、どうするかというと、お金を集めることが、まず第一でした。ですから、中学校を設立する前に、アメリカ、ヨーロッパに行つて、募金をしてお金を集めて、それで土地を買つて中学校を造りました。

中学校は、最初はなかなか、そんな有名校、名門とは思われませんでした。やはりキリスト教理念に基づいているので、一応特質のある中学校でありました。実は先日、ライネルス先生の下に勉強した一人の人に名古屋で会ひまして、彼はこう言いました。ライネルス教区長は、わずかな学生に、「おまえたちはビリだと思ふが、われわれは決して、みんなを受け（容れ

脱力・以下同）る気はないのだ」と言つたということです。非常に嬉しかつたです。みんな受けるではありません。

ですから、やはりある意味で、きちんとした入学試験をやつて、例えば、定員を割つても、「とにかく誰でも受ける」ということではないということです。最初から、やはり教育精神を徹底化したつもりでした。

キリスト教を表看板にすることはできなかった時代ですから、ご承知のとおり、ちよつと国粹主義が最高の段階、教育勅語崇拜みたいな時代でしたから、教育勅語に基づいて、「興起して忠実あれ」とか、「強い責任感」とか、「想像的な精神」とか、いろいろなことを言つて、パソナリティー形成に力を入れるということだけしか言えませんでした。

ところが、戦争の間、まず昭和十五年（一九四〇）からですか、いろいろ私立学校に対する相当な弾圧がありまして、その前に南山小学校も造られたのですが、数年だけしかありませんでした。小学生、つまり義務教育は、外人あるいは私立であれば、許されませんでしたから、それを手放して、昭和一六年（一九四一）、ライネルスは退任しました。校長として辞めて、理事長としても辞めまして、教区長としても辞めました。全部辞めて、やはり外人に対する一種の弾圧がありましたから、多治見修道院に行つて、そこで、ちよつと昭和二〇年（一九四五）、戦争の終わつたすぐ後に亡くなりました。

総合学園

結局、戦争の間に中学校は焼かれて、いろいろ弊（被カ）害を受けましたが、戦争が終わって、まず復興のために、父兄の協力を得て、今度はパッヘ神父がライネルスの仕事を引き受けました。パッヘ神父も多治見、あるいは軽井沢の教会にいたのですが、秋になって、ムードはまるで日本に（ママ）変わったのですが、マッカーサーは、特に日本カトリック教会に呼び掛けて、「プロテスタントもカトリック教会も、日本の再建に協力せよ」と呼び掛けました。それで、当時のバチカン大使のメラも、非常に、カトリック教会の協力を呼び掛けました。

特に教育を通じて何かを尽くさなければならぬという依頼があったのですが、パッヘ神父は東京に行つて、そのときの学校教育局長となられた田中耕太郎さんに会いました。田中耕太郎はカトリックで、最高裁判所長官にもなりましたが、彼の奨励、また、「ぜひあなたは、しっかりした総合学園を造るように」という激励を受けまして、パッヘ神父も、やはり今度は総合学園を造ると。時期がよいということでした。

それで、いろいろな人と相談して、まず神言会本部に頼みました。今度はもう、日本は戦争に負けたので、お金もないし何もないので、外国、特にアメリカからお金を得て、アメリカに募金に行きました。そして、今の学園が持っているほとんどの

土地を相次いで買いました。

今度は、第一に中学校を再建して、募金をしました。と同時に、外語専門学校を造りました。これは終戦の一年後です。スタートは小さいです。今、大学とか専門学校といったら、専任一〇〇人とか、職員何名とかですが、ちつともそうではなくて、専任教員七名という、南山外国語専門学校でした。ところが、男女共同教育でナンバーワンでした。まだ名古屋にありませんでした。

次の昭和三二年（一九四七）には、一六人の専任になりました。初めから、やはり神父たちも数人入っていました。専門学校を造つた理由は、本当は専門学校をずっとやるつもりではなかったらしく、ただ、まだ日本の教育状況がはっきりしていなかったので、大学を造ることはできなかったということです。次年度に、発表された、ご承知の教育基本法が發布（ママ）されました。それに基づいて大学を造ることができて、パッヘ神父は早速、総合学園のトップとして、大学の設立の準備を始めました。同時に女子中学校、それは後で女子高等学校に延長されました。

このような大学を造ると、もう名古屋教区というのは到底、力はないですから、名古屋教区から全面的に神言会に責任が全部戻つてきて、理事とか理事長は全部神言会員でありました。実は、理事会は一九五七年まで、つまり、ほぼ九年間ぐらい、

exclusive、ただ神言会員が理事でした。なぜかという、全ての本当のお金、つまり、土地を買うお金、建物を建てるためとか、あるいは経常援助は、全部神言会本部から来ましたのです。日本からお金をつくれないので…。

パッへの構想

そうしますと、やはり神言会本部は理事会をパイプとして使って、どんな計画を進めさせたということです。特にパッへ神父は、このような大きなプランを実現するために、神言会本部が毎度お金を心配するということも良くないと、アメリカのシカゴに本部を設けて、ラルフ神父が財政オフィスを造って、神言会大学の、特に南山、あと輔仁大学もありましたが、それを援助するためにナショナルオフィスを造りました。毎年、本来に大きな金額が入りました。それに基づいて、ほぼ八万坪くらい、ここの辺で全部まとめて、だんだんと買われます。その中に、今のキャンパスの大部分があります。全部は、すぐに買えませんでした。

あと、八雲町、楽園町、山里町、五軒家町とか、いろいろ。それも本当にビジョンが良くて、お金を惜しまずに「将来のため、将来のため」と、有名なパッへ神父の大風呂敷が広げられました。その大風呂敷には、永年勤続者は皆さん、ニコニコし

ます。大風呂敷というもので、彼が自分の学長室に、将来の大学と、こちらにきれいな図がありました。今より大きいです。

そのときの彼の夢、ビジョンというのは、今より大きくて、やはり学部は四つでしたが、その四つの学部というのは、今の学部とまるで違いました。もちろん、一つは文学部です。一つは社会学部といえます。今の経済・経営・法というのを全部一緒にして、Social science、社会学と。あと一つは、人間教育を中心に、人間を考える教育哲学を学部にしよというアイデアを持って、あとは自然科学という、四つの柱で、総合大学と。大学と大学院、研究所、全部入れて、大きなものを計画しました。

けれども、実際の現状、出発の現状というのはどういうものかという、四つの学科だけしかなかったのです。英文、仏文、独文と、中国語です。中国語は後で廃止されて、いろいろ問題が起こったのですが、設立当時の学科でしたから…。

女子部は、最初はまだ、こちらには何も建物がなく、全部向こうのキャンパスでやりました。女子部が造られる前には、パッへ神父の総合学園というのは、全部男子部でした。大学もあって、男子部は、今、壊されたヨハネ館のそば、もう少し道のほうにありました。今、清水建設が材料を置く場所です。

あと、女子部のために、岡崎から軍隊の校舎を移して、いわゆる「北校舎」を造りました。それは狭いところで、中学、高

校、あと大学の男子部、女子部が全部あって、後でだんだん広げていきました。結局、大風呂敷は、ある意味で実現されました。

神言会と南山学園

最初、やはり一番大きな問題は財政問題でしたが、経常費の三分の一は神言会から出されたということです。あと、建物と土地は全部神言会からということです。そして、神言会員は無料で働いたということで、出発から一九六八年ぐらいまで、サラリーがない、無料でした。ところが、保険の問題もありまして、いろいろな問題がありますので、そのままではおかしいと。あと、日本は世界の経済大国になったのですから、外人が無料で働くのは、こちらのメンツもあるから、それではいけないと。さらに、このごろは、国庫援助（ママ）の対象になるためには、サラリーをもらわないと援助の対象にもならないから、今のやり方としては、神言会員はサラリーを普通どおりにもらうが、生活費のためにだけ必要なものをいただいて、他は寄付する、また返すということです。

いつも神言会から、七、〇〇〇万円とか、大学にポンと入るわけですが、プラス臨時のいろいろな援助があります。例えば一番最近では、法学部ができたときに、とにかく文部省の要求

で「とにかく一億円足りないから、三日以内に出せ」と言われて、神言会に「お願いします」と言うと、ポンと一億円を出してくれて、それで救われました。

あるいは短大が造られたときに、一億三、〇〇〇万円とか。特に、このキャンパスが造られたときには、六億円に近いような金額プラス土地を提供ということでした。そういう意味では、過去には財政援助が大きいけれども、やはり今は、ある意味で、当たり前のですが、それを制限せざるを得ないような状況です。

また、理事会も、今は神言会員は理事の過半数を占めるだけです。神言会員全員が理事会ではないということです。当然です。また、理事会は日本の法律に基づいて、最高の、全く独立した決定機関であります。つまり、直接ローマからの指導というのには、もう必要ないということになっています。

ただ、今まで全ての学校長プラス理事長が神言会員であったということは、やはりいろいろな理由があつて、設立母体たる神言会は、その精神的なバックとか、あるいは国際的なバックを与えて、いろいろ重大な、南山学園の精神の支えにもなると思っています。

神言会について

しょっちゅう「神言会、神言会」と言うので、神言会とはどういうものかということ、ちょっとお話しします。ちょうど二年前に、神言会の創立一〇〇年祭になりました。その一〇〇年祭に当たって、創立者と最初の宣教師、中国に行つて宣教師として頑張った一人が、カトリック教会に、いわゆる聖人として認められたわけです。これはもう大変、われわれにとつて嬉しいことです。つまり、われわれの模範、あるいは全世界の信仰者、信者に、模範として示されているのだということです。

アーノルド・ヤンセンは大変信仰の深い人で、彼は神父であり数学の先生でしたが、ちょうどドイツのビスマルク時代で教会が迫害されたりして、ドイツではミッシェンのために何もできないので、ビスマルクの権限外で、ドイツのミッシェン会をオランダにつくりました。そして、ドイツ人を集めて、ここで最初の宣教師を教育して中国に送り、だんだんと全世界に宣教師を送りました。

結局、ミッシェン会とか宣教師の会であるということ、「神言会」、「神のみ言葉を布教する会」ということです。それは同時に修道会でもあります。カトリック教会にはいろいろな修道会があります、一番有名なのはイエズス会です。上智大学はイエズス会によって設立され、維持されていますが、イエズス会

は神言会とどう違うかと申しますと、まず、サイズです。イエズス会は神言会に比べて八対一ぐらいのサイズで、イエズス会は大きいです。イエズス会は、だいたい四万人の会員を持っています。神言会は五、〇〇〇人前後ということで、これが一つです。

もう一つは、もちろん創立者が違います、年が違うということです。イエズス会は、ちょうどルーテルの時代、中世末期に、イグナチオというスペイン人によって造られました。「イグナチオ教会」のイグナチオに造られました。

特に学問をやったりして、非常に優れた立派な指導者がイエズス会の中にいる、また過去にいたということで、そういう意味では、いわば創立の時代が違うのと、サイズが違いますが、他では非常に似ています。われわれは時々、未成年あるいは青年のイエズス会とも言われるぐらいです。まだ大人になっていないイエズス会のような格好で、やはり大学も経営しているけれども、イエズス会に比べて少ないということです。

イエズス会は東京で、非常にトップで頑張っています。われわれは名古屋で、トップで頑張っているとか、日本で見てそういうことですし、世界のスケールから見ても、このようなものだなと。

修道士の誓い

修道会というのは、カトリック教会の中の一つのグループです。すから、みんなカトリック信者ですし、特別に神のみ言葉に従い、できれば奉仕的な生活をし、三つの誓いを立てるわけです。修道会のメンバーになるには、どの修道会でも同じです。ドミニコ会、フランシスコ会、イエズス会、神言会、何でもそうですが、三つの誓いを立てます。

一つは「清貧」、つまり、自分で財産をためないということです。例えば、自分のサラリー、あるいは自分のお金を、会に任せます。もちろん、仕事に必要なものは、また自分に任せられるとか、いろいろありますが、基本的には、財産を自分で持たないということです。やはり「幸いなるかな、心の貧しき人」というキリストのみ言葉を、できれば実現するということをしています。

二番目の誓いというのは、結婚しないこと、独身生活をするということです。独身生活をするということは、当然、会の、コミュニティのメンバーとして生活して、派遣されるところに、いつでも自分で行けるようにして、全くフリーに、仕事と修道生活のために自由になるということです。ですから、結婚する人は、やはり Automatic に、神言会を辞めるということは当然です。

三番目は、「従順」です。私が日本に来たのは、派遣されたから来ました。私のことを話してはいけません、仕事を命じられて、行くのだと。私は、パツヘ神父さんに「経済学を勉強せよ」と言われて、「経済学は何だかさっぱり分かりません」「いやいや、勉強しなさい」「はい」と。経済学を勉強したのは、私が経済学が好きだからではないということです。

ですから、好き嫌いを問わず、とにかく言われたことをするのだと。それを、できるだけ好んでするのだということです。そういう三つの誓いというものがあります。それはもちろん人間ですから、模範的にそれを実現するかしないかは全く別問題ですが、努力はするということです。それが修道会です。

やはり一九世紀と違って、現代にミッション会であることは、特別なチャレンジであるということです。つまり、一九世紀には、ご承知のとおり、例えばドイツ人が中国に行ったら、「私はドイツの偉い文化の代表者で、おまえらは馬鹿だから」、こうこうと。「覚えなさい」とか、「分からないのか」とか、「馬鹿な中国人」といって、みんながお辞儀をしました。

このごろは、ちつともそうではありません。「植民地主義者の代表者」、あれはいけないということです。結局、一九世紀とか一八世紀とか、その前は、ヨーロッパの人々は、教会の代表者を含めて、いわば割と文化の高いレベルから後進国に行つて、いろいろ布教するというのは、ある意味で簡単でしたが、

このごろは、例えば日本に來ると、日本の文化を尊敬し、むしろ日本の良さをまず勉強すると。その後、神のみ言葉をこちらで語ることになってしまいました。ある意味で、非常に複雑になってしまいました。

神言会のミッション

ですから、神言会の特別なチャレンジとしては、アジアの諸文化を研究すると。その諸宗教の中に良いものを認め、それを信仰の中にも生かすということ、そのためにも研究所を造りました。宗教文化研究所というのは、ミッション会、神言会の必要な一つの事業です。

ということは、日本の文化の素晴らしさ、その良さを再検討し、その中でキリスト教とどのようにかみ合っているかということ。もちろん、日本にだけ素晴らしいものがあるということも言えませんが、西洋にも変なものもあるし、良いものもあると。そういう国際的な文化交流、同じレベルに立つということですよ。

別に見下すとかいうことはなしでという、終戦後からのミッション会の姿勢、アプローチということで、特に日本に來る若い連中は、まず日本語をちゃんと勉強し、日本の文化、日本の歴史を勉強しなければなりません。一方通行で西洋文化を伝達

するということとはできないということが、ミッション会の現代の姿勢です。神言会も、そういう意味でいろいろな、特にアジア諸文化の研究を行っていますし、いろいろな大学や高等学校を運営しています。

また、修道会というのは、やはり原則として国際的なコミュニケーションです。ですから、フィリピンに行けば神言会がある。台湾に行くと神言会がある。南米に行くと神言会がある。ニュージーニアに行くと神言会がある。インドネシアは、もちろん神言会がある。インドには、堂々とあります。たくさんの方に神言会があります。外人だけではなくて、フィリピン人は非常に多い、インド人が多い。今度、神言会のフィリピン人二人が、またここに勉強に來ます。

こういう、本當に一つの家族として国際的な兄弟関係を持つということ自体は、人類のためにも大変重大です。われわれの小さいピオ館では、八カ国か、よく分かりませんが、みんな一緒に飯を食べたりして、どの言葉を語っているか自分でも分かりません。本當に私のドイツ語は、半分は英語になってしまったり、日本語になってしまっています。日本人、アメリカ人、ドイツ人、アルゼンチン人、ハンガリー人、ベルギー人とか、いろいろいます。それを一つのコミュニケーションにするということです。これは、カトリシズムの本當の原則です。

ですから、ミッション会は、これを一番、自分で実現しなけ

ればいけません。異質の、いろいろ言葉の違う人間と毎日一緒に暮らすというのは、時々つらいです。しかし、それこそ、いろいろな弱さとか、自分の弱さを、またいろいろ見極めて、絶えず努力することです。そういう意味で、神言会は、このような修道会であり、ミッシェン会として、いろいろ活躍しています。

神言会は、日本にメンバーがいたい一〇〇名しかないのですが、半分はこの辺の神学校と、こちらの学校関係です。学校関係で仕事をしているのは、だいたい三四―三五名だと思います。あと、南山教会とか恵方町教会とか膳棚教会とか、いろいろな教会があります。また、秋田とか新潟県にあつて、長崎にもありますが、そういう教会の仕事をするとか、南山は長崎でも有名だそうです、そのときに甲子園に出ました。ということ、そのジョークを知らない人は、省略してください。「名古屋にも姉妹校だそうです」とか、コメンテーターが言いました。

そういうことで十分だと思いますが、今度、たまたま私はローマに、一〇月と十一月だと思いますが、神言会総会に代議員として行って、いろいろ神言会の諸問題を審議し、同時に、新しい総長を選ぶためにも行くことになっていますが、二カ月ぐらい留守させていただきます。神言会員として、いろいろ別の義務もあるわけです。

国際交流としての外国人教員

ただ、なぜこのようなややこしい異人、外人、ろくに日本語も話せない人たちを学校に入れるかというのは、確かにちよつと問題であるのではないかと思います。やはり単なる設立母体であるということではなくて、このような、南山のような大学、あるいは高等学校に国際交流の現場を実現するということは、非常に大事だと思います。

日本の一番大きな、これからの問題というのは、閉鎖性だと思っています。つまり、国際時代に、本当に精神的に備えているか。アジアの文化、西洋の文化をただ学ぶのではなく、交流する、与える、与えてもらうという、ギブ・アンド・テーク、ギブ・アンド・レシーブということです。そのために準備しているかどうかというのは、少々私は、やはり十分ではないと思います。

これからの南山学園の重大な課題としては、やはり真の国際文化を受けて、人間的な交流も図るということは、非常に重大なものであると。やはりスタッフの中に、あるいはアドミニストレーションの中にこのような人がいるということ自体は、大切ではないかと思ひます。

また、日本人の神言会も、そういう異人と一緒に暮らしているから、しよつちゅう摩擦の中で生きているということでもあるので、いわば核心にこのようなグループがあつて、国際的な

ファミリーを大学の母体としているということは、南山学園に特殊性、特質を与えたのではないかと思います。

By the way 手前味噌になるのですが、手前味噌というのは、昔はみんな、自分の味噌を作ったので、手前の味噌を褒めたのですが、このごろ手前味噌はありません。みんな大きな会社の味噌ですから、手前味噌と隣の味噌は同じだということになって、どうもことわざも分からなくなってしまうています。

では、その手前味噌ですが、例えば、われわれ神言会員は日本に来る前に、高等学校を卒業して七年間、大学院のレベルで勉強します。そして、司祭になって、「文盲人」として日本に来ます。文盲人ですよ。日本に立つと、何も読めません。例えば私も、ほぼ三〇歳に近いときに東京に来て、何も分かりませんでした。それで、またABCから始めます。ようやく日本語も覚えたら、今度は経済学について、何も知りません。「アメリカに行つて勉強せよ」「はい」。では、勉強すると。

このように、非常に勉強の時間が長いです。普通の日本人の先生は、もう堂々と教壇に立つて、論文もいくつか書いたときに、「こいつは、またABCから、経済学とか何とかを始めるというのが事実です」。

ですから、それは専攻、専門の勉強には、はつきり言つてマイナスです。では、何でプラスかというと、三つか四つのAspectが、いつも頭にあります。自分の神学、哲学、自分の西

洋文化、日本の文化を外国文化として勉強したと。あとは、また新しい専攻。そういう多面的な考え方を持つと、やはり刺激になります。普通、日本人の考えないことをパツと言ふのだと。それだけは価値があるかと思っています。

他に、場合によっては、専門としては中途半端であつても、キャンパスの中にこのような、いわば国際的に摩擦された、あるいは磨かれた人がいて、いろいろ面白いものができるのではないかと思います。その代わり、中途半端な日本語と、あるいは非常に変な性格を持つとか、それも我慢しなければいけないと思いますが、われわれはみんな弱い人間ですの……。

「人間の尊厳のために」

神言会の沿革史と、なぜ神言会が依然として学校に残るかということでしたが、今度は、南山学園の理念というものを少し話したいと思っています。

理念は、ご承知のとおり、「人間の尊厳のために」という非常にきれいな言葉がありまして、これはボルト理事長が南山のモットーとして選んで、採択されました。私は非常に美しい言葉であると思います。ちょうど現代に、いろいろなマスコミの中、巨大な組織の中、また政治の中に、個人、本当に「人」という、「人間」という、何か歯車になつて溺れてしまふようです。

例えば東京に行くともう本当に人間とは何かと思うのですが、地下鉄とか道路をアリののように歩いているようで、朝から晩までハイライズビルの中にいると、どうですか、無能な感じ、処理されている感じがします。そういう意味では、あえて「人間の尊厳」を教育の理想として抱く。一人一人の人間に、非常に無限な価値があるということ、これはまたキリスト教の精神の基礎であります。実は教育基本法の一歩最初にも、そう書いてあります。

日本におけるミッシェン系スクール

そういうことは、やはり大事であると思います。ですから、こういうことは、もちろん南山だけではなくて、例えば上智大もそうですが、あるいは、他のキリスト教関係の学校もだいたい「人間の尊厳」と言わなくても、スローガンとして持たなくても、そういう精神で動いていると思いますから、終戦後は、キリスト教関係の学校は非常に増えて、信用も非常に上がったと思います。

ご承知のとおり、有名な大学の中で、キリスト教関係の学校は大変ハイランクを持つわけです。青山、同志社、立教、ICU、もちろん上智もありますが、まだあります。実は現代、プロテスタント関係の大学の数は三〇校あります。カトリック系は

一一校です。その一一校の中に、例えば聖心女子大とか雙葉とかそういうものもありますので、女子大学は比較的多いです。二つの大きい大学と、規模の小さい、一、五〇〇人ぐらいのサイズがあります。

中・高等学校・短期大学は、なお多いと思います。短期大学は、プロテスタントは四九校ありまして、カトリックは三〇校、その間にちよつと増えたかもしれませんが、数字は三年前のもです。高等学校は、プロテスタントは八四校、カトリックは一二校、相当多いです。その中にも有名校はいろいろありまして、栄光とか、あるいは、イエズス会関係とか、あとラ・サールとか、いろいろありまして、その中で南山は有名校だと言わざるを得ないと思います。

ですから、考えますと、全国でキリスト教関係の学校は、高等学校以上と大学を含めて、人数から見ても、ざつと八%ぐらいなのではないかと思えます。それほどあつて、それで、決してどこか下のレベルで動いているのではなくて、比較的高いレベルの教育を与えているということは、やはり日本国民は、このようなキリスト教関係の学校は何か特別なものを持っていて、特別の理念に基づいて教育を行うということを感じていて、そういう学校を信用しているのではないかと、私は思います。

南山学園の四つの理念

今度はまた南山に戻ります。「人間の尊厳のため」と申しますが、やはりもう少し具体的に、どういうものかを考えなければならぬと思います。私は、だいたい四つの特徴があると思います。前には、いつも「三つ」と言っていて、今度は急に四つになって、「学長、変わったな」と言われましたが、やはり時代が変わると、もう一つが非常に重大になりました。

真理

一番目は、まず、いい学校になれということです。つまり、慎重に教育を行うと。慎重に勉強する、責任を持って真理を探究する。ですから、党派的な動きとか、あるいはマスプロ教育とか、あるいはインチキなこととか、まあ、どうか間に合わせるとか、お金儲けのためにやるとか何か、それはまず一切駄目だということです。

非常に信用できる、学問的に言うと、真理を第一の原理にする、つまり、勉強全ては、正しいのか正しくないのかと考えます。ですから、間に合わせの、いわばインチキ、卒業していくんですかと、ちょっと割引、三割は三〇〇万円だと、四割は一、〇〇〇万円だということはないということです。南山は、そ

のためによく知られています。本来に「南山は真面目」「南山は信用できる」と、社会によく言われます。みんな、よくご存じだと思います。

ですから、いい学校になると。国立大学だけが、いい学校だとは思いません。私立大学も、本当にしっかりやれば、いい学校になれるということです。それはもちろん、国立をまねする必要は一切ございません。国立大学は膨大なお金を持って、いろいろな研究所を並べています。われわれは何をするかということをよく考えて、われわれの非常に制限された、わずかな財政や人事の限界内でベストを尽くす。ですから、職員も本当にベストを尽くすということです。このような立派な大学は、決して信用を失ってはなりません。一度世間の信用を失ったら、駄目です。例えば、〇〇〇（聞き取れず）とか、愛知医科大学とか、今、いろいろ問題になっているのがあります。

われわれは、犠牲を払ってもいいから、立派な、いい大学を造ると。これが第一です。例えば、クラブ活動のために割り引きを与えるとか何とか、勉強はしなくてもいいとは思いません。ですから南山は、スポーツ有名大学には、なかなかありません。アマチュアスポーツをやります。学生によく言うのは、スポーツは徹底的にやるけれども、アマチュアスポーツですと。プロスポーツではないよということです。

キリスト教主義に基づく教育

二番目は、キリスト教ヒューマニズムとかキリスト教理念に基づいて、全ての教育を行うということです。これは、最初からの目的でした。ライネルス教区長は、最初から「キリスト教」とは、あまり言葉として入れられませんでした。パツヘ初代学長は、すぐにキリスト教主義に基づいて教育を行うということとを、寄付行為に入れました。「キリスト教世界観に基づいて」と書いてありますが、われわれは「キリスト教主義」と、後で変えました。

それはどういうことを含むかというと、まず、キリスト教は人間個人を中心にするということです。各々の人間は、神に造られた、神に応えなければならない良心的な存在であるということです。ですから、右と左を見て、どうでもいいから、みんなが騒ぐなら私も騒ぐとかいうことはいけません。個人の責任感、各々の人が問われているということです。それは非常に大切です。

よく日本は集団主義の国民だと言われますが、やはりそれに個人の責任感、良心的教育、そして、神のみ前での謙虚性を持つということなのです。

また、精神的な価値は物質的価値より大切だということです。精神文化を重視するということです。エコノミックアニマ

ルと言われた日本人は、やはりここはいろいろ反省するべきです。でも、幸いにも反省時期に入っています。「精神文化再発見」と、最近よく言われまして、やはりこういうところに、南山学園は重大な責任を持つということです。試験さえパスすれば、あとはどうでもいいというようなことはいけません。Moral responsibilityと言いますが、そのMoralityの優先性ということなのです。

あとは、本当にキリストを自分の理想として見るということです。これはもちろん、みんなクリスチャンになれということではなくて、教育機関として、教育の中で、とにかく学生はキリスト教に接して、そこから自分の世界観、自分の人生観のインスピレーションをもらうと。それは正式な信者になることとはまた違ったものですが、やはり山上の説教とか、あるいは隣人愛という立派な理想を徹して、それを自分のものにする。そういうことがあまり価値のない現代の物質文明の中に、どこか浮いている、動いているような社会の中に、このような人をつくるということが使命です。

それを隠さないで、いろいろなプログラムの中に大胆に入れます。南山は、中学校、高等学校、大学、女子短期大学でも、どこでも、キリスト教概説とかキリスト教思想とか、いろいろなものがあるわけです。「それがあるのだから、先生がやるべきだ」というのではなく、いや、学園全部、やはり事務員も、

こういう精神を自分のものにしてほしいと。つまり、「私には関係ない」ということではありません。どの会社でも、自分の精神というのを、みんなに徹するわけです。トヨタに行くと、みんな、ただトヨタのバッジを持つということではなくて、朝、トヨタの社歌を歌ったりして、いろいろ訓練を受けて、それで「トヨタ人」「自動車人」となります。

われわれは、もつと尊い理念を持っているのに、やはりそれに無関心なのではなくて、本当にそれを自分の限界内で吸収するということは、全ての教員も職員も、一つの課題になっているのではないかと思います。これが二番目の特徴です。

国際性

三番目は、どう考えても、国際性というものです。カトリックは国際性であると。前に、修道会は必ず国際的なものであると申しましたと同じように、南山は国際的視野を持つと。国際的文化の理解を高めるために教育をするのだということです。

日本は、こういうところには非常にご熱心でありまして、西洋文学、あるいは英語の勉強とか、スペイン語の勉強、いろいろな勉強を、みんな熱心しているわけです。そういうこと非常に結構なのですが、国際性というのは、与えるということではなくて、一方通行で英語を学んでいたというのではな

くて、やはり今度は、日本の文化をも与えるような姿勢は、どうなつたらいいかという、これからの問題です。われわれは、こういう国際性を、いろいろなレベルで実現しているわけです。まず、教員は、どの教員でも、ほとんど一〇〇%に近いですが、大学では、最低一年間は外国で勉強するチャンスを与えるということですね。あとは、語学とか西洋文化を勉強させます。あとは、このキャンパスに、Center for Japanese Studiesという、むしろ今度は逆に、日本文化を紹介する仕事を引き受けて、今度の秋から、ざっと八〇名に近い外人が一生懸命日本語を勉強し、日本の歴史、日本のビジネス、何でも勉強するだろうと思います。そういう意味では、学校が国際的な使命を持つということとは当然であります。

あと、学生はどんな留学します。留学のプログラムが拡大されたわけです。もちろん、大学のレベルでそういうことは実現しやすいですが、中学・高校のレベルでも、アメリカにグループを連れていって、いろいろやってはいます。そういうことがあります。

地域社会に対する責任

もう一つ、四番目というのは、地域社会に対する責任です。これは新しいです。新しいというのは、やはり新しい問題とし

てクロージングアップされてきました。と申しますのは、まず、大学が増えて、進学する率がどんどん増えてきました。ところが、そのみならず、大人の教育が問題とされてきました。つまり、言い換えれば、生涯教育という問題が、国際的な問題になっていきます。

昔は、もし誰かが高等学校を卒業して、大学を卒業して、あるいは小学校を卒業して、あとは勉強しなくても、世界はそう変わらないし、自分で覚えたことを、終生実現すれば、それでよいということでした。やはり今度は、しょっちゅう変わる、その変わりつつある世界を理解する努力は、生涯努力にならないかもしれません。

そのために、もちろんZENさんとか、いろいろな本は、いプログラムを持っているわけです。持っているけれども、ただテレビを見て、一人で学ぶというのは、やはりどうも、それではプロ野球を見ても面白いし、いろいろあります。やはり学校に来て、本当に教室の中で生きた講義を聞いて、あるいはゼミナールに参加して、質問したりして、こういう生きた勉強というのは重大ではないかと思っています。

社会人と大学

実は私が非常にびっくり仰天した一つの数字です。平均して、

現代のアメリカの大学の学生の半分は社会人です。これは大変です。つまり、社会人とはどういうことかというところ、場合によっては、学生は二、三年休学して会社に行ったりして、また戻ると。それで、また単位を増やして、卒業すると。あるいは、主婦が少し暇があつて、夜、学校に通つて、このコースとか、あの科目とか、一生懸命勉強します。一流大学でも普通のカリッジでも、みんな、そういう仕事をしています。

私の母校、ハーバード大学も、夜にそういうことをよくやっているし、週末にやっているし、驚きました。ボストンの、よく知っているいろいろな人から手紙をもらつて、四〇歳の人「私はハーバード大学に通っているのだ」と。「へえ、何をしている?」「いや、大学がこういう講義をわれわれに開講しているから、みんな、一生懸命行つて、ノートを取つて、試験を受けて、やるんです」と。そういうことがあります。

南山は、地域社会にそれほど信用されたとすれば、思い切つて地域社会に還元する、信用に応えるということが、これからの課題でしょう。そのために、南山大学にて「友の会」という組織を作つて、名前は前からあつたし、そういう組織はありましたが、目的をまるで変えまして、法人会員と個人会員をさらに募集しました。そして、その友の会を地域社会との結び付きの母体にして、社会人講座を始めました。第一発は、もうこの秋から実現します。サラリーマン大学、サラリーマン講座で

す。

今度は、具体的に経理問題、財政問題とか、あるいは、法律、商法とか、いろいろな問題から出発しますが、その友の会の担当理事はO氏です。たくさんの人が彼を知っていると思います。が、彼は南山のファンの一人です。O氏は、近いうちに南山は、技術問題ではなくて、もっと重大な人間問題について講義してほしいという希望を述べています。人間哲学、現代における生きる方法とか、思想とか、いろいろな問題を一般市民向けに、土日、あるいは休み中に講座を開いて、どんどんやってほしいと言って、われわれも、やはり先にそう考えたいわけです。

また事務の人の仕事が増えるかと思うので、何か補助をしなければいけないと思うのですが、とにかくそういう仕事で、さらに地域社会と結び付きのある学園にすることです。短大も、人間関係の講座などを社会人にも開くわけです。そういう仕事、あるいはプランが進められてきました。

ですから、四つの特徴といいますと、結局、いい学校になれということ、真剣に、インチキなことは絶対しないということと、第二は、キリスト教精神に徹した教育、それに自分のインスピレーションをもちょうということ、三番目は、国際性に富んだ、国際交流、国際文化の交流の場、あるいは、プログラムにすると。四番目は、地域社会に積極的に還元する、交流を図る、サービスするという責任を持つということです。そういうこと

は見事なプログラムではないかと思いますが、実現には苦労します。そう簡単ではありません。

例えば、このセンターも非常に苦労しました。住宅を見つけるとするのは、もう大変です。ですから、これからの問題はどこにあるかという、いろいろあります。ただ、これからはどこに問題があるかとか、どうするかということの前に、一言、とにかくどのように職員に協力してもらわなければならないかということです。

南山ファミリ

最初から、南山の伝統というものがあります。いわゆるファミリースピリットが強いと言われてきました。喧嘩はあまりない。分裂がない、派閥がない。よそから来る人は、みんな、そういうことを言います。「南山は、いい雰囲気ですよ」と。派閥、争いがない。よそに行くと、国立大学もいろいろあって、どうも何か、激しいらしい。このような精神を、とにかく自分の中にも徹して、ファミリースピリットを保ちたいということです。

一番、その危険になるのは、セクシヨナリズムです。「俺は知らない」「私の仕事ではない」と。もちろん普段は、私の仕事ではないことはしないで、こちらはこちらの仕事、私は私の

仕事ですし、多少凸凹があっても、「今、この人は忙しい」「私はまた来週だ」とか、いろいろありますが、いざとなると、やはり壁は絶対のものではありませんから、譲り合って、手伝い合い、協力し合うということが、まず第一です。学園全部が一つです。一つ理念から生まれた、一つの方針を持っているということですから。

ですから、今、採用は学園採用ですが、いろいろ回されるというのは、時々はいいい場所で働き、あとはまたちよつと嫌なところに来たというの、我慢し合う必要があります。しかし、最初から拒否的な、いわば「こつちは嫌い」と、「命じられたから仕方がない」というような渋い顔をしないで、互いにAcceptするということです。そういう状況の中で働きます。

われわれは教員が第一線で、いわば学生に直接面してやっています、前に申しましたように、このごろ南山の財源は、ご承知のとおり赤字ばかりです。なぜかという、べらぼうに授業料を上げることはしないからです。やはり良心的に、本当に社会の信用を大事にしますし、世界の二位に立っている国民所得の国が、どんな外国から援助をもらうのも、どうも合わないような気がします。ですから、臨時的には、神言会にお願いするということは依然としてあるだろうけれども、できればこちらの力ということですから。

そうしますと、やはり協力し合うということです。特に、人

件費が一番高いものですから、無駄に、例えば、「私は何もしないで、アルバイト、アルバイト」と、アルバイトに仕事をさせて、自分は仕事をしないとか、ああいうことはいけない。つまり、全体としては、とにかく、われわれの一緒の仕事ですから、大事にしようということで、機械を大事にするとか、電気とか、そういうことは全面的な協力の一つです。

ですから、ファミリースピリットとして。ファミリースピリットというのは、やはり共同責任で初めてできるものです。国立は、まるで違います。予算があるから、使います。なぜ使うかという、使わないと来年も出てこないということです。南山学園の理事会は、そういう国立の頭を持っていません。使わないから、来年は出てこないというものではありません。必要なら出すけれども、また来年欲しいから、どんどん使うという、ああいう国立性は、いけない。

そういう、ちよつといろいろ勝手なことですが、本当は私の言うべきことではないでしょう。事務局長の言うべきことではあります、私の感じとしては、やはり一緒に、それぞれ自分の現場で、このような大きな仕事をするのだということです。

南山にプライドを持って、その精神を、できれば自分でも勉強し、自分で理解するということです。そうしますと、喜んで仕事をします。「あいつは何をやっているか、さっぱり分らない」ということではなくて、南山はどういうプログラムを持

っているかと、少しでも興味を持って見れば、例えば、南山の履修状況とか、いろいろ、外で聞かれたら、「あなたたちは、こういうことがあると聞いたのですが」「いや、私は専攻が違うから知りません」ということはしないように。『南山ブレイン』を読んでもとか、だいたい学園の中で何がどのように動いているかを、少し関心を持つことが大事だと、私は思います。

展望

最後は、「これからの展望」ということです。あとは少し質問に時間を残したいので、簡単にしたいと思います。まず、理事会で、ほとんどみんなが、一応一致しているのは、このサイズでよろしいということです。もうあまり、これより大きくはしないといいと。短大は、今のロケーションは最終的なロケーションであるとか、ちょっと窮屈なのですが、それはまたいろいろ、将来の課題として残っているのではないかと考えられます。女子部と短大のすり合いとか、いろいろ土地の問題とか何とかがあって、何かあればというような感じがしますが、まだ具体的な解決の糸口は見つかりません。

大学としては、新しい学部を作るつもりはありません。例えば医学部とか、理科系の学部は作らないということです。学科は別で、一学科とかを、どこかに。それは学部の中の問題です

が、あまり拡大は考えません。質のアップを考えるとということです。

先日、皆さん、ご覧になったかと思いますが。あるいは、ご覧にならなかったかもしれませんが、旺文社の全国調査がありまして、各大学の入試の難易度、いかに入りにくいかということで、われわれ関係者が、みんな非常に嬉しくなったのは、南山は非常に高くなってきたということです。

英米科はちよつと絞ったので、全国六位になってしまいましたが。もう昔は考えられませんでした。法学部でも、新出発なのに一六番目ぐらいです。三百何校の中で一六番目という、そう悪くありません。出発がトップ五%の中に入るということは、結構、見通しがいいのではないかと思います。それは、信用されているということです。

そういう意味では、質を改善するというのが、これからの仕事です。大学の中のいろいろなプログラムは、そういう意味で考えたいと。先日、補佐とStrategyの相談をいろいろしまして、だいたいこういうことで、センターはどう位置付けるかとかが、われわれの教養プログラムをどう改善するかとか、そういう、あまり外には見られないようなことをするということです。

あと、社会人講座を、来年、再来年、拡大します。これは学部ではなく、プログラムです。いわば対象の違う人に、どう還元するかということになります。あとは、これは、いい学校を

造るという意味で、国際性から見て、中・高校に、今度は国際学級というものができました。国際学級というのは、外国から戻ってくる子女の受け入れというのが全国で問題になっているのですが、例えば、マレーシアとか、あるいはアメリカのどこかに派遣されて、五年ぐらい向こうにいた家族が、今度は日本に戻ってきて、例えばトヨタ、あるいはノリタケでとかいうことで、今度、男の子、女の子が中学生だとか、高等学生（高校生）だから、どうしたらいいかと。

向こうでは別のことを勉強していたので、もう入学試験はできません。頭は良くても、普通の公立とか、あるいは私立に、なかなか入れないのだと。文部省は、この問題を取り上げて、東京では国際基督教大学（ICU）を指定校にして、三億円の援助金を出して、そういう国際高等学校のようなものを、今度造ります。

中部では南山が指定校とされまして、受け入れの全面的な面倒を見ていただくようにと。理事会もそういうことを決定いたしました、トヨタとか、森村グループという、日本陶器とか、日本ガイシとか、伊奈製陶とか、そういう森村グループといいますが、そこからの依頼と、中経連からも依頼があつて、そういうことを前向きにやります。もちろん一年生から始めなければいけません。あと、大学には、Center for Japanese Studiesを通じて、大学の普通の学生になる道を開きました。そういう

意味で、社会には大変貢献がなされています。

課題としての国際交流

あとは、新聞その他のマスコミを通じて、あるいは、皆さん、お聞きになったかもしれませんが、南山は国際交流に非常に困っているということです。「下宿とか住宅に困っているから、国際村を造れ」とか、うるさいことを、県とか市とか、トヨタに申し上げましたら、今度、市と県とかが、努力して実現するようになるといったことになったみたいです。

それなら、例えば東山公園に、立派な国際文化会館とか、国際村ができたら、南山は大いに助かると思いますので、将来はそういうことで。うちの力では、到底それは造れません。もう予算は三〇億とか四〇億の桁ですから、もうわれわれには問題外です。造っていただくということが、方法になっていると思います。

しかし、どうも職員はいろいろな、国際的何とかかんとかと聞いて、何か自分には関係ないみたいなものを感じるのではないかと思うのですが、財政問題としては、どうやり得るかは、まだ具体的には分からないのですが、ちよつと二、三人と、伊藤先生とか、山本事務部長ともちよつと考えたのですが、何らかの形で近いうちに、職員にも国際交流のチャンスを与え得る

のではないかとということで、何かプログラムをうまく組んで、もちろん、一発でみんなが行くということは到底できませんし、順番を考えざるを得ないでしょうけれども、とにかくヨーロッパ研修旅行のようなものを、職員に安く、あるいは半額とか何かでできたらと、私は思います。

ただ観光グループに参加するのではなくて、ちゃんといういろいろなことを説明していただいて、自分で、グループとして動く、非常に親しくなるし、いろいろな意味でいいのではないかと思います。これはもう、やはり職員養成、職員研修の一部としても考えたら、あるいは価値があるのではないかと思います。私としては、そういう方向に、今、努力をしたいのですが、それは、全面的な、もちろん、いわば積極的な、皆さんの考えの中にあるということです。

ただ、「おまえは今度、ヨーロッパに行け」とか、そんなことではないのですが、何か、やはり積極的に南山の、いわば国際性、あるいはキリスト教精神、あるいは、大学そのもののプログラムを全部勉強しながら、その中の一つとして、ぜひ、そういうこともあれば、なお非常に良くなるのではないかと思います。

その辺で、やはり私は一つ、学園全部が国際交流に関係があるということにしたら、何か研修の一つ、新しいビジョンが出てくるのではないかと思います。いろいろ皆さんのご協力によ

って実現できればと思います。私としては、そういうことをぜひ、理事会にお願いしたいということです。意見があれば、後でいろいろお聞きしたいと思います。

施設の拡充

あとは外的な問題として、皆さん、ご承知だと思いますが、大学としては、図書館もいつぱいになっているので、レーモンドのほうには、何か考えてくださいと。どのように図書館を増築し、書庫みたいな、タワーみたいなものを、どう造ればいいのかと。これは一つの宿題になっています。一応、学生にも発表しているわけですが、図書館を新しく造るのではなくて、全部図書館ではなくて、相当の冊数が入る研究書庫のようなものです。それで図書館の中を少し再整理するチャンスです。

あとは、第二体育館です。これは先日、リーダーズキャンプに行って、学生にいろいろ「どうですか、学長」とか、「何か第二体育館について、いろいろなことを彼から聞くのですが、本当ですか」「どういうことを考えているのですか」とか、一四〇名のリーダーズキャンプに行ったら、体育の学生に聞かれました。

だいたい、三階建てぐらいのものだと思うのですが、今、自動車部の連中がやっているようなもの。もちろん、こんな広い

場所はないかもしれませんが、三階建てのようなものと、一番うるさいクラブ、エレキギターとか、ああいう連中は、隣にすぐ迷惑を掛けていますので、一番地下的なところで、あまり響かないようにします。あとは、やはり卓球部とか、いろいろなものが入って、あるいは武道の、空手とか剣道とか柔道とか、あと、体育の先生方の研究室も含めてやれば、何かいいものができればと思います。

部室は、またただけ増えるわけですから、例えば、柔道とか剣道とかを全部移すと、向こうはまた新しいクラブのために部室ができるとか。そういうことはいつできるかということをして、いろいろ今、財政でそろばんをはじいています。どんな問題があるのか分かっていますから、一番Kさんが分かるでしょう。三年前には考えられないぐらいですが、三年先にはポツポツ建てられるなら、いいのではないかと思います。それは、もう年次計画的にやろうと、みんなが努力しています。あるいは我慢するということです。大学としてはそうです。中・高校とか短大については、私は発言権はありません。何も分かりません。ということです。

しかし、考えてみると、結局、南山学園はほとんど毎年、何かを建てています。もう最近一〇年間、ずっと相次いでやっています。きつい財政状況の中で、とにかくコツコツとやりました。こちらも、まあまあいいものができたと思うのですが、そ

れはやはり、皆さんの協力の下で、初めてできます。

皆さんの協力の下でというのは、やはりお金の問題ですから。そういうことは、将来もできるようにと、本当にいい、きれいな、調和のある学園を造り、みんなの協力で、楽しい毎日を過ごし、階級区別なし、セクシヨナリズムなしで、一つのコミュニティ、ファミリーとして、このような南山にプライドを持てるような学園を持つて、われわれはそのメンバーであるということになれば、本当に何より嬉しいと思います。

ざっと一時間半近くなりましたが、あと二〇分ぐらいございますから、質問をどうぞ。遠慮なく、いろいろ聞いてください。もうわれわれは同志ですから。学長はあまり聞きません。まず分からないということ、あるいは関心がないとか、いろいろあります。こちらはもう、われわれはファミリーです。

(ここで司会が質問を促し、職員に対するキリスト教の解説の機会について質問が出される)

私は、自分ではこう思います。結局、南山大学を卒業する学生は、四単位はキリスト教概説を必修科目として聞くわけです。あとは、また二、三年で四単位、キリスト教思想、これは学生だけです。

職員には、今までそういうプログラムがないということに、私はちよつと寂しい感じがしないことはありません。と申しますのは、どの会社でも、自分の理念、ほとんど理念はあまりな

いますが、例えば、私は知りませんが、とにかく陶器を作る理念というのがあるかもしれません。一生懸命これを勉強して、これにプライドを持つように、その精神を生かすというようなプログラムは、当然必修科目としてあるわけです。会社に入ると、当然それを全部覚えなければいけないということは、むしろ協力的精神をつくるための一つの条件になっています。

ところが、こちらは宗教ですから、遠慮します。当然、宗教は自由です。ですから、クリスチャンになれとは、一言も言いません。例えば神父ですが、「あなたたちの職務は、当然、みんなカトリック信者になるべきだ」と言うのは、私は自分を裏切ることになります。つまり、私は、良心の自由、信仰の自由を宣言する一人です。

しかし、やはり内容を知ることです。勉強して「ああ、そういうものだ」という、少しシステマティックに勉強するということは、正直な話、やはりどうも南山の職員の一つの重大な、あるいは課題なのではないかと思えます。私は研修計画の担当者ではありません。講師として頼まれたのですが、これは理事会直轄です。

ただ、キリスト教精神どうのこうのというのはさっぱり分からないということで、自分個人で勉強しても、なかなかチャンスがありません。時間外にロゴスセンターに行って勉強したいといっても、五時四五分になれば、急いで帰らなければいけま

せん。炊事をやったり、いろいろ仕事があります。仕事の間にもできないし、そんな、「あいつは勉強するふりをして、実は怠けたいのだ」という噂は、それもなお悪いですし。

何かこう、やはりわれわれは遠慮しているなどは、ちよつと感じます。ですから、あくまでも信仰の自由は大事だと。しかし、ある意味では、基礎知識を持つということは、私は、やはり必要なのではないかと思えます。それは、一つのいい質問でしたし、私のストレートな答えは、そういうものです。

(司会)は具体的なことは今後の課題であるとして、次に移ろうとするが・・・)

そうなのですが、やはり学校方針として、ただ好きな人がやるという意味ではなくて、ここの質問は、一応学校の、いわばファミリーメンバーになると、否応なしに、とにかく基礎的な勉強はしなければいけないという、基本的な姿勢があるのかということなんです。これが今までと違うわけです。

やはり職員も、いわば、例えば自分の就業規則を知らなければならぬということと同時に、南山大学の理念に一番深い関係を持っているキリスト教は一体どういうものかと、カトリシズムはどういうものかと、頭に収めて、知ることなんです。

自分は仏教の信者であるというのは立派です。何も言いません。例えば大学で、一年生に「では、試験ですから、キリスト教思想を全部覚えたのだから、おまゝたちはクリスチャンになれ」

というのは、とんでもない話です。ですから、知識です。やはり教育の一部として。そういう意味で考えれば、必修科目です。つまり、当然そういう、一人の職員として、ここに籍を置いて協力する人は、基礎知識として、就業規則と同じように、キリスト教はそういうものだということを知るといふ、宿題はそういうものだと思います。

それはもちろん、するかしないかは、またいろいろ議論を呼びます。そう簡単ではありません。ただ、学生については、簡単にします。

（司会より閉会のあいさつ）

どうもありがとうございました。

〔編者註〕本講演は、一九七七年八月二五日、南山大学名古屋キャンパスM棟MB1教室にて、南山学園の職員研修の一環として行なわれた。録音テープは南山アーカイブズに保管されている。編者が適宜見出しを付け、司会・質問者の発言は、編者が要約して（ ）内に記した。

「解説」 小冊子にみる南山大学略史とJ・ヒルシュマイヤーの講演

永井 英治

はじめに

本稿は、南山大学第三代学長ヨハネス・ヒルシュマイヤーが行なった講演を録音したテープから文字起こした講演録についての解説である。講演タイトルが「南山学園―その沿革と将来の展望」であったように、本講演は南山大学を中心とした南山学園略史を含んでおり、それはヒルシュマイヤーの学長就任（一九七五年四月）前から南山大学新入生向けに発行されていた小冊子を受け、ヒルシュマイヤー学長の名によって発行された小冊子の間に位置付けられるものであった。そこで本解説では、講演に前後する小冊子についても紹介・解説を行ない、それを踏まえて講演録の内容に言及するものとする。

一 いくつかの小冊子

南山大学第二代学長沼沢喜市の任期末期から第三代学長「ヨハネス・ヒルシュマイヤー」の時期に、南山大学の歴史を簡潔にまとめた小冊子が幾度か刊行された。現在、南山アーカイブズに保管されているものは、

- ・『南山大学の歩みと展望』（一九七四年？）
- ・『南山大学の歩みと展望 昭和五十二年』（一九七七年）
- ・『南山大学の教育理念』（一九七八年）
- ・『HOMINIS DIGNITATI 人間の尊厳のために』（一九七九年）

の四種類である。これらの刊行の前提には、南山大学二十五周年史の編纂事業とその頓挫、一九六〇年代後半に南山大学が新入学生ガイダンスのために小冊子を発行し配布した経験があったものと推測される。それらの小冊子のうち、現在確認できるものを列挙すると、

- ・『南山大学—教育と学生生活—昭和41年度』（一九六六年）
 - ・『大学と学生生活昭和42年刊』（一九六七年）
 - ・『大学と学生生活昭和45年刊』（一九七〇年）
 - ・『大学と学生生活』（刊行年次不明であるが、一九七四年までの情報が記されている）
 - ・沢田昭夫『カトリック大学と人間の尊厳』（南山大学ガイダンスシリーズNo.1、一九六七年六月）
 - ・荻野恒一『学生と健康』（南山大学ガイダンスシリーズNo.2、一九六八年三月）
- となる。

この新入生ガイダンス向け小冊子のうち、『南山大学―教育と学生生活―昭和41年度』の目次は以下のようになっている。

I カトリック大学の理念

(1) 大学教育

(2) 大学と社会

(3) カトリック大学の特質

(4) 南山大学の特徴

(付) 本学のモットー等の説明

II キリスト教的教育

III 学生生活

(1) 学 修

(2) 課外活動

(付) 学園の沿革

このように、盛りだくさんの内容に見えるが、全体で一二頁と薄く、それぞれの叙述は簡略である。例えば「I (3) カトリック大学の特質」では、「カトリック大学とは、簡単にいえば、そこでの研究や教育の活動が、さいごにいたって、カトリックの原理によってインスパイヤされ、導かれるところの大学である」と定義した上で、信仰の真理に基づく研究姿勢、カトリック的価値観を反映する秩序、国際性・普遍性をめざすことが簡潔に説明される。『大学と学生生活』というタイトルになってからは構成が変わり、「II キリスト教的教育」は「I (5)」に置

かれる。内容も、キリスト教的教育のための制度・施設についての案内から大きく変わり、キリスト教的教育とは、キリスト教的人間観に基づいて学問における人間の追求を深化し、統合するものであるという論述に変わっている。(付)「学園の沿革」は、学園内の学校や大学の学部組織の新設がある度に記述を更新しているが、ほぼ事実の記載のみである。「課外活動」は、自発性の尊重と大学教育に役立つ限りにおいて認められるべきとする限界を指摘していた文章が、刊行年次不明の版から、『南山スポーツ』一九七三年一月一九日に掲載された「これからの課外活動のあり方」をそのまま掲載するものに変更している。変更後の文章は、学生の課外活動に対する抑制的な調子で書かれており、学生運動を意識していることが明らかである。一九七三年段階では南山大学の学生運動は多数の学生の支持を失っていたが、新入生に大学の姿勢を示すべく、この差し替えを行なったものと推定される。

一方、沢田昭夫『カトリック大学と人間の尊厳』は学生運動を徹底して批判するために著されているといっても過言ではない。同書は、学生からの問いに対する大学教員からの回答という形式をとっているが、そこでの大学教員の回答は、学生の社会や政治に対する理解を含む学生運動に対して厳しい言説が展開されており、たとえば東京大学での全共闘の集会に招かれて発言している三島由紀夫の方がよほど学生の主張を理解しているように思われるほどである。もともと、沢田の主張の中には「中世という実体はない(五頁)」ベトナム戦争が一方的に米国の侵略戦争だといいつけるのか(一九頁)、「国があなたに何をしてくれるかとときく。あなたがたが国のために何をやるかとときき給え」(J・F・ケネディ)という心がまえの方が、反対一方の態度よりもずっと人間の尊厳に即している(二八頁)「など、俄かには首肯し難い言説も散見し、最後に見られる「神の国の姿を浮びあがらせようではないか(三〇頁)」という結びの句には目を疑う。沢田は、これ以外の文章でも徹底して学生運動が主張する論理の未熟を厳しく批判しており、学生の不適切な行動には実力行使も辞さなかった。沢田によって書かれた一冊

を大学発行の新入生向けガイダンスに充てたことは、南山大学の学生運動に対する姿勢を示していたといえよう。

二 南山大学創立二十五周年史

沢田昭夫は南山大学の歴史に言及しなかったが、カトリック大学として南山大学はどのような歩みを示してきたのか、現在を理解するためにも大学自身の発言が求められる。しかし、小冊子に付された「学園の沿革」は叙述が簡略であり、南山大学の歴史について解説を施したものとはいい難かった。南山大学二十五周年史の編纂が計画されたのは、伝えるべき南山大学の歴史がまとめられていなかったこともあり、大学創立二十五周年という節目に相応しく、実施すべき事業と意識された。この編纂事業が始まるまでに、南山大学の歴史を知ることができる刊行物は『南山学園の歩み』（一九六四年一月、南山学園）のみであり、南山学園の歴史を主題としたこの書物で南山大学について記されているのは、大学設置を中心としたごく初期の叙述と外国語専門学校など前史にとどまっていた。南山大学は、一九六四年四月から五月にかけて南山学園発足の地である五軒家町から現在の名古屋キャンパスがある山里町に移転した。したがって、『南山学園の歩み』は、五軒家町時代の南山大学を対象を限定せざるを得なかった。また、この書物は、南山学園創立二十五周年史の企画が挫折し、職員の松風誠人が独力で執筆したものであった。

このような背景のもとに南山大学創立二十五周年史が企画され、教員による編纂委員会が組織された。この編纂事業は、いくつかの原稿と委員による年表とを残し、どのように結末を迎えたか曖昧になっている。残されている原稿は執筆者のオリジナル原稿であるが、出典・注記はなく、記述も「読み物」に近いものになっており、史料の

調査・収集の成果が反映されているとはいい難い。必要な調査が行なわれたか否かも明らかではない。委員による年表には、この年表でしか知り得ない記述もあるが、委員個人の日記を利用したと聞いており、典拠は明らかにされていない。

これに対し、松風誠人の論稿は、刊行物からはわからないが、松風メモと呼ばれる残された資料群と突き合わせていくと、史料調査を踏まえたものであることがわかる。この成果が継承されていれば、南山大学創立二十五周年史は陽の目を見たのかもしれない。

三 ヒルシュマイヤーの講演

一九七七年八月、ヒルシュマイヤーは職員研修の一環として、「南山学園—その沿革と将来の展望」と題する講演を行なった。この講演の中でヒルシュマイヤーは、南山学園の歴史を一書にまとめる作業を進めていることに言及しており、これが『南山大学の歩みと展望』として実現したと考えられる。このことは、ヒルシュマイヤーが講演の最後の部分で南山大学の特徴として指摘した四点、教育と研究を重視する大学、キリスト教主義に基づく大学、国際性、地域社会に対する責任が、『南山大学の歩みと展望』においても踏襲されていることから伺える。

しかし、ヒルシュマイヤーは南山大学創立二十五年史編纂事業については言及しない。作業を進めていたのは、ヒルシュマイヤーの講演による限り、専任教員ではなかったようである。また、ヒルシュマイヤーの講演の中では、南山学園の歴史と南山大学の歴史が厳密には区別されていない。講演が行なわれた時点で、南山学園が経営していた学校には、南山大学以外に、南山高等学校・中学校（男子部）と同（女子部）、南山短期大学があった。また、

過去においては、南山大学の前身校である名古屋外国語専門学校、旧制南山中学校、南山小学校があり、南山学園が一時経営した学校には、四日市南山高等学校、長崎南山高等学校・中学校があった。もちろん、これらの学校の歴史を総合すれば南山学園の歴史になるものではない。南山学園という総合学園の歴史が総合的に叙述されなければ南山学園の歴史とはならない。ヒルシュマイヤーの南山学園史は、事実上、南山大学の歴史を骨格にし、そこに前史と学園内の各学校の歴史をちりばめるものであったのかしれない。

また、そのようなものであったのかもしれない南山学園史の骨格となる南山大学史は、学生に向けて配布される冊子のためだけではなく、南山大学の構成員全体に向けて発信されるべき意図を持っていたと考えられる。誰が年史類を読むのかという疑問は尽きないが、ヒルシュマイヤーの意図では、「南山コミュニティ」として期待される南山大学／学園の構成員が共有すべき歴史が提示されるものであったと考えられる。

『南山大学の歩みと展望』における叙述では、前史を含めて歴史的事実（南山大学や学部学科の設置年次や内容など）について記述は簡潔で、学部学科の設置などの制度の変更がどのような目的・意図を持つものであったかの解説が、少ない字数の中で重視されている。その意味では、共有されるべき歴史は、単純な事実の羅列ではなく、共有すべき歴史認識・評価に踏み込んでいたのである。それらの歴史認識・評価は、大学運営を担うヒルシュマイヤーらの意志によって決断され、実施されてきたものであるから、聞くべき意味を持つ。ただし、いくつかの事象については、異なる説明が可能な場合もあり、さらに、全体を貫通するキリスト教主義からの解説については、読者によっては保留とされる場合も考えられよう。

とくに『HOMINIS DIGNITATI 人間の尊厳のために』は、それまでの南山大学の歴史や教育理念についての解説というスタイルを超え、南山学園のモットーである「人間の尊厳のために」という主題が何故に如何に有効である

かについての議論にかなりの紙数が割かれており、大学教育論から離れた議論も展開される。哲学・宗教学を必修とする南山大学の学生は本書を理解できなければならないと設定されているのかもしれないが、読者が感じるであろうハードルはかなり高くなっており、配布された新入生がこれを直ちに読了し理解できたか疑問である。このような叙述の発展は、「南山コミュニティ」の構成員全体を読者として想定していたためではなかったか。本書にのみほぼ同内容の英文が記されていることも、読者対象を広く想定したことの表れと考えられる。本書がこれらの一連の刊行物を締め括るものとなったのは、学生を主たる読者対象とすることの限界が見えたのかもしれない。

四 「南山学園—その沿革と将来の展望」

職員研修の場で南山大学長が学園史を講じるというのは、この講演が初めての試みであつたらしい。テキストが準備中ということもあつて、ヒルシュマイヤーの講演は、立て板に水とは評し難い。しかし、荒削りであることが逆に論点を際立たせている。一例を挙げれば、ライネルスによる（旧制）南山中学校設立と運営における理念とその実践は、学校経営を圧迫しかねないものであつたが、そこで学んだ者たちには強い感銘を与えている。この理念が後に影響しなかったとは考え難い。また、パツへの総合学園構想の「大風呂敷」は印象的であるとともに、それが実現して、その現場にすることに驚くべきである。

神言会について説明に時間を割いているのは、「南山学園の沿革」に直接関連しない部分もあるが、学校法人南山学園の設置母体がどのような組織で、その活動の一環として南山学園の運営にどのように関わっているか、学園の構成員として理解しておきたいところである。

南山学園の理念についての解説にも時間がさかれ、終わり三分の一ほどは、その解説に尽くされている。ここで展開される南山学園の理念は、ほぼ南山大学の理念または南山大学に即した今後の課題である。講演の会場が南山大学であり、おそらく聴衆には南山大学で働く事務職員が多かったであろうことから、南山大学について述べることにそれほど違和感はなかったのかもしれない。しかし、学園職員を対象とした研修会であったことを考えると、どこどこで南山大学＝南山学園として話が展開されているのは気になる人ものではないかと思われる。ヒルシュマイヤーも自覚していたのであるが、大学以外への言及はやや弱い。さらに、大学以外の学校についての解説は、自分は適任ではないとするが、これは自己矛盾を来しかねない。ヒルシュマイヤーは聴衆である職員に向かって、学園内の自分の部署以外に関心を持ち、共通認識を築くよう求めているのであるから、ヒルシュマイヤー自身が南山大学以外についても知らなければならない。それは、各校の連携という実際的要請に対応するためでもあり、そのことは講演の中でも言及されている。

講演後の質疑では、非キリスト教徒の職員がカトリックにどのように接すればよいかという、聴衆からの質問に対し、ヒルシュマイヤーはかなり苦慮している。このことが逆にヒルシュマイヤーの誠実さを伝えているが、学生に対して、キリスト教的世界観を共有することを議論の前提とする論調が、前述の冊子群では徐々に強調されているのに対し、ここでのヒルシュマイヤーは、考えの途上であつたためか、かなり慎重な姿勢を見せている。

学生に対しては教育の場面で、具体的には授業という方法でカトリックへの理解の機会を提供できる。質問した職員もそのことを前提としている。職員に対して、研修という方法を取ることが適切であるか、強制と受け取られないかヒルシュマイヤーはかなり逡巡している。繰り返すが、慎重な配慮である。この配慮が学生に対しても維持されていたのであれば、冊子群の叙述は現在残されているものとは違った様相を示したのではないかと思われる。

見方を変えれば、それらの展開はカトリック大学における教育について、ヒルシュマイヤーが考えを深化させていった結果である。本講演は、その初期に位置付けられるものといえる。

註

- (1) 『南山大学の歩みと展望』『南山大学の歩みと展望昭和五十二年』『南山大学の教育理念』には奥付がなく、正確な発行年次を知ることはできない。ここでは、序文に記された年次と巻末データの年次から推測したものを掲げた。
- (2) 本書には奥付が同じでありながら、表紙の文字デザインが異なる版がある。あるいは、発行年以後に学生に配布するために追加印刷されたものか。
- (3) 三島由紀夫・東大全学共闘会議『美と共同体と東大共闘』、

- 二〇〇〇年、角川書店「角川文庫」、初出は一九六九年。ただし、三島は、最終的に学生との共闘を拒否した。
- (4) あとがきによれば、松風は公表できるあてもないまま原稿を書き連ねていたところ、刊行を慫慂され、原稿の体裁を整えて出版された。刊行を急いだためか、松風は南山学園内に現存する刊行版のはばすべてに自筆で加筆修正を加えている。松風の努力に敬意を表するとともに、本書についてこの修正版に拠ることを求めたい。